

# 小沢有作先生を送る

大串 隆吉

小沢有作教授が、1996年3月をもって本学を定年退職されることとなった。そのため、本号は同教授の退職を記念して編集された。

先生は、東京大学教育学部教育行政学科の大学院修了後、当時では長い浪人生活を経て1967年に本学に助手として着任された。69年助教授に、83年教授となられた。本学に着任された年に、『民族教育論』明治図書を出版された。これは、先生の博士論文でもある。

赴任当時、アメリカ政府によるベトナム侵略がエスカレートし、ベトナム侵略戦争反対運動が広がっていた。先生は民族解放運動の中の教育的価値を見定めようと、ゼミではベトナム解放運動と教育をテーマに取り上げられた。学生達もベトナム侵略戦争反対運動に参加していたため、このテーマに関心を強く持ち、積極的に参加した。アジア・アフリカの教育に強い関心を持ち続けた古川原先生がいらしたこともあり、この分野の研究・教育が当教育学専攻の大きな特色となった。

1970年の暮れに、「アジア、アフリカ、ラテンアフリカ教育研究会」(AALA教育研究会)が創立された。この研究会には、古川原、斉藤秋雄、皆川卓三というこの分野の先達のほかに、AALAの民族解放運動に触発されて、1960年代以降にその教育に関心をもった若手が参加していた。その若手の中には先生の本学での教え子もあり、もちろん先生は中心メンバーであった。研究会の事務局は、本研究室におかれ、定例会も本研究室で行われた。研究会の研究成果は、『AALA教育・文化叢書』として出版された。

一方、1970年前後は大学にとって試練の時期であった。東京都立大学も封鎖され、教員間、学生間で、あるいは教員と学生の間で封鎖の是非をめぐって激しい対立が生じた。当専攻の学生には封鎖反対の学生が多かったため、先生はいらだちを隠せなかったようである。今では想像がつかない激しいやりとりが

行われた。お互い傷つくこともあった。議論は封鎖問題だけではなく、大学教育のありかたにも及んでいた。学生は教育学教育はどうあるべきかを教員に問い、回答を要求していた。大学ではもちろん、研究室でも先生は緊張の連続であった。先生は、よく大学をやめられなかったと思う。

先生は大学闘争や部落解放運動から色々学ばれたと思う。それは、大学の授業に現れていた。ゼミで「戦後教育におけるアジアの欠落」をとりあげながら、他方で自分史を語り、父母を語ることをとりあげた。自分史、父母を語ることによって、学生達が自分を読むだけではなく、当事者の被教育体験をくぐらせて学校制度を問直すことを意図されていた。

そして、ゼミで障害者、被差別部落出身者、在日朝鮮人、夜間中学生から直接話を聞き、交流を行うようにされた。これは、先生が教育運動の中でこれらの人々と出会い、深く関係を持つようになった時期に始まった。先生は、これらの被差別者の視点から学校を問直すことも自分の仕事とされた。新たな教育のイメージは、先生が好んで使われるようになった「共生」という言葉にあらわれている。

落としてならないのは、先生が早くから外国人留学生の受け入れに積極的であったことである。先生が指導した留学生の出身国はラオス、韓国、中国であった。先生はこれらの留学生のために労を惜しまなかった。研究室が国際交流の場ともなった。

先生の研究されてきた民族差別・抑圧の教育を批判し、克服しようとする課題は、先生が1990年代になって横浜市や神奈川県の日外国人教育協議会の座長になり、その教育方針をまとめられたように、ますます重要になり、行政もとりあげてきている。このことは先生にとって大きな喜びであろう。

この三年間、私達教育学研究室は初めに山住先生、ついで坂元先生を送り出し、そして今年小沢先生を送り出す。この三人の先生方の中で、小沢先生が一番早く赴任し、一番長く在任していたことになる。先生の意にそわなかったことが沢山あったに違いない。しばしば我々を叱責されたことがあった。にもかかわらず、後進の援助に尽力されてきたことは感謝にたえない。先生の退任とともに教育学研究室の一つの時代が終わろうとしている。